

## 老いを生き、死を生きる

中央仏教学院講師 寺川 幽 芳



暦のうえでは早くも月の初めに立春を迎えるとはいえ、相変わらず厳しい寒さが続く二月は、いち早く春の訪れを実感する梅の便りを心待ちする月であります。そして、二月には、こうした春を待つ気持ちをあらわした伝統行事が各地で催されますが、仏教徒にとっては、お釈迦さまが現

し身の縁尽きて般涅槃に入られた「涅槃会」を忘れることはできません。仏事として法要を営むかどうかは別にして、私は仏典に伝えられているお釈迦さまの最後のお姿に接するたびに、言葉にならない感動と不思議な安らぎを感じます。それは、幾多の「涅槃図」に描かれているように、人間はもとより鳥も獣も、草も木も、すべての生命がその存在の根底に「斯くあれかし」と願ってやまない世界が現成し、いかに生きるべきかを身をもって説かれた「老いを生き、死を生きる」教えがそこに示されているからです。『遊行経』や『大般涅槃経』には常随の弟子アーナンダをはじめ、仏陀との今生の別離を悲しむ人々とお釈迦さまとの最期の時間が、深い感動のうちに語られています。

「人々よ、いまは私の最期のときである。しかし、この死は肉体の死であることを忘れてはならない。肉体は父母より生まれ、食によって保たれたものであるから、病み、傷つき、こわれることはやむを得ない。仏の本質は肉体ではない。さとりである。肉体はここに滅びても、さとりは永遠に法と道とに生きている。だから、わたしの肉体を見るものがわたしを見るのではなく、わたしの教えを知るものこそ私を見る。……諸行は無常である。放逸なることなく精進するがよい」

このお釈迦さま最期の説法は、諸行は無常なるがゆえに愛別離<sup>あいべつりく</sup>苦を生じるが、諸行は無常なるがゆえに愛別離苦を超えて生きる未来があるという真実を、まさにその現し身の縁尽きる瞬間まで説かれたのです。いま、日本の社会は、かつてどの国も経験したことがない早さで少子高齢社会に突き進んでおり、誰もが老苦の不安を感じています。しかし、その不安はただ老後の生活や介護といった問題だけでなく、老いとそれにつづく死の意味が分からぬ不安が奥底に潜んでいることに気づかぬ、自分自身の心の問題があることを忘れてはならないと思います。

いまこうして、「涅槃会」を機に心あらたにお釈迦さまの生涯をしのび、その最期の説法を聴くと、寒中に在りながら春を心待ちして生きる今日の一日が、すでに春へむかっていることに気づかされます。

(龍谷大学名誉教授：宗教担当)